

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A new framework for acquisition of Japanese kanji compounds targeting Chinese learners of Japanese : In consideration of general semantic usage and semantic inferability

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 毓敏, CHEN, Yumin メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002216

中国語母語学習者の日本語の漢字語習得研究のための 新たな枠組みの提案

——意味使用の一般性と意味推測可能性を考慮して——

陳 毓敏

(お茶の水女子大学大学院生)

キーワード

漢字語, 意味使用の一般性, 意味推測可能性, 中国語母語の日本語学習者, 習得難易度

要 旨

これまで中国語母語の日本語学習者の日本語の漢語習得研究に主に文化庁(1978)の枠組みが応用されてきた。この枠組みでは、日本語と中国語の意味関係がどのように対応しているのかによって、意味関係が同じ(Same)、一部重なっている(Overlap)、著しく異なっている(Different)、同じ漢語が存在しない(Nothing)に分類されている。この枠組みのOverlapは日中で共通する意味が一般的に使用されているものと、ほとんど使用されていないものが混在している。また、Nothingには中国語の漢字知識を使って推測が可能なものと不可能なものがある。このため、中国語母語の日本語学習者の漢語習得の難易度の検証に適さない。本研究はこの点を解決するため、共通する意味の母語話者による使用一般性と意味推測可能性を考慮した新たな枠組みを提案し、その枠組みの分類に必要とされる意味使用の一般性と意味推測可能性の調査方法及び、試行例を紹介する。

1. はじめに

宮島(1958)の調査によって、『例解国語辞典』に収められている語彙の53.6%が漢語であること、昭和24年6月1ヶ月間に朝日新聞の社説で使われた語彙は約56%が漢語であることが明らかになっており、日本語において漢語の占める割合が大きいことが分かる。したがって、日本語教育において漢語を含む漢字語¹の教育は重要であると考えられる。

中国語母語の日本語学習者は母語の漢字知識があることから、非漢字圏の学習者に比べて日本語の漢字語学習においてあまり困難がないと考えられている。確かに、未知語でも母語の知識で理解できたり、中国語にない語彙でも漢字の組み合わせから類推できたりという利点がある。しかし、その一方で、同じ漢字語であっても中国語と日本語で意味が異なる場合にも、母語知識に頼ることで間違った意味に解釈する危険性もある。したがって、中国語母語の日本語学習者に対しても漢字語の教育は重要である。

では、中国語母語の日本語学習者の漢字語の教育のために必要とされることは何であろうか。それを考える場合、まず中国語母語の日本語学習者にとって、どのような項目が学習困難である

かを明らかにすることが不可欠である。これまでの漢字語の教育においては、対照分析に基づき、日中で共通するものは易しく、異なるものは難しいという予測を立て、習得難易度の検証が試みられてはいるが（陳 2003）、まだ十分に検証されたとは言えない。また、その対照分析の枠組みが習得難易度の検証に適切であるかどうかは論じられていない。

そこで、本研究では、まず、これまで漢語の対照分析に用いられてきた枠組みが漢語習得難易度の検証に適切であるかどうかを検討し、習得難易度の検証に資するべく、新たな枠組みの提案を試みる。

2. 先行研究

2.1. 従来の漢語対照分析の枠組み

これまで漢語対照分析の枠組みは、大村(1965)、野沢(1970)、文化庁(1978)、文化庁(1983)、三浦(1984)、曾根(1988)などにより提案されているが、日中の意味の対応関係の捉え方によって、それぞれの分類は異なっている。漢語研究に最も広く応用されてきたのは文化庁(1978)、三浦(1984)の枠組みである(陳 2003; 加藤 2005)。そこで、文化庁(1978)、三浦(1984)の枠組みを中心に紹介し、その他の枠組みと比較する。

文化庁(1978)では、漢語が次の4タイプに分類されている。

Same：日中両国における意味が同じか、または極めて近いもの。

Overlap：日中両国における意味が一部重なるが、両者の間にずれのあるもの。

Different：日中両国における意味が著しく異なるもの。

Nothing：日本語の漢語と同じ漢字語が中国語に存在しないもの。

三浦(1984)は、Overlapに関して、意味範囲の広さという点から3つの下位分類を設けた。中国語のほうが意味範囲が広い(以下 Overlap I)、日本語の方が意味範囲が広い(以下 Overlap II)、意味が一部重なるが別個の意味を持つ(以下 Overlap III)の3分類である。

文化庁(1978)、三浦(1984)の分類をまとめると表1のようになる²(以下、文化庁/三浦の枠組みと称す)。

文化庁(1978)の枠組み以前にも、いくつかの分類が試みられている。大村(1965)は、漢語を7タイプに分類した。そのうちの2タイプは、中国語にない語彙とされているが、1つは類推によって中国人に意味が理解できるもの、もう1つは理解困難なものである。この2つは文化庁のNothingの下位分類に当たる概念と言えるが、大村(1965)では他のカテゴリーと同列の分類になっている。文化庁(1978)には大村(1965)を引用して「漢字から意味の類推が行われる」という記述はあるが(p.16)、分類としては取り入れられていない。

また、野沢(1970)には、日中で意味が重なる語について、三浦(1984)と同様の3つの下位分類が見られる。しかし、中国語にない語彙というカテゴリーが、その語彙が中国語の他の漢字で置き換えられるものと、日本語の単語の持つ意味がなく置き換え不能のものというように、推

測可能性とは別の軸で下位分類されている。中国語への置き換えが可能かどうかという観点では習得難易度の検証の枠組みとしては適切なものとは言えない。このような背景から、本稿では文化庁（1978）と三浦（1984）に基づき、新たな枠組みの提案を試みることにする。

2.2. 従来の対照分析に基づく漢語習得研究

中国語母語の日本語学習者の漢語のタイプによる習得難易度の研究はまだ緒についたところで、管見の限りでは、安（1999）、陳（2003）、加藤（2005）の研究しか見あたらないが、これらの研究では文化庁／三浦の枠組みが用いられている。

安（1999）は、Same, Different を対象とし、文脈に合う漢語を選択肢から選ばせることで、中国語母語の日本語学習者における母語の影響を調べた。その結果、中国語母語の日本語学習者は間違っただけによる誤用が多いことが示された。

文化庁／三浦の枠組みの一部だけを用いた安（1999）に対し、陳（2003）は枠組み全体を用いて、台湾の中国語母語の日本語学習者を対象に漢語の難易度を調べている。漢語の意味に合う母語訳を選択肢から選ばせる方法で漢語の難易度を調べた結果、日本語レベルに関係なく Same は易しく、Different は困難であること、また、Nothing の中に漢語を構成する漢字から意味を類推できる語とできない語があることが明らかになった。つまり、大村（1965）が提案した、Nothing を意味の推測可能性という基準でさらに下位分類する必要があることが実証されたと言える。しかし、Overlap I, II, III の間の難易度は明らかにできなかった。

加藤（2005）も文化庁／三浦の枠組みを用いているが、Overlap は I と II だけを対象としている。また、Nothing を中国語知識で推測しやすい語と困難な語に分けて調査している。正誤判断テストを用いて、中国語母語の日本語学習者だけでなく、英語母語の日本語学習者、日本語母語話者を対象にすることで中国語母語の日本語学習者の漢語知識の正の転移と負の転移を調べた。その結果、Same は正の転移、Different は初中級の場合は負の転移、Nothing は一部正の転移があること、Overlap は上級でも正確な語義を習得していない場合があることがわかった。

上述した通り、中国語母語の日本語学習者に対して効果的な漢字語の教育を行うためには、どのような漢字語が習得困難なのかを特定することが重要であり、その難易度を検証できる枠組みが必要である。文化庁／三浦の枠組みを用いた3つの研究のうち、陳（2003）、加藤（2005）から Nothing をさらに下位分類する必要性が示されたことは上述の通りである。そして、陳

表1 文化庁／三浦の枠組み

漢語種類	中国語	日本語	例
Same	m1 m2	m1 m2	理想 露骨
Overlap I	m1 m2	m1 φ	解決 入手
Overlap II	m1 φ	m1 m2	現金 上品
Overlap III	m1 m2 φ	m1 φ m3	単位 下手
Different	m1 φ	φ m2	学長 勉強
Nothing	φ	m1	既婚 我慢

注1：m は意味、複数の場合は m1, m2 と示す。φ は欠落。

注2：m1, m2 は使用の一般性とは関係ない。（文化庁 1978；三浦 1984 の分類を参考に筆者が作成）

(2003)でOverlap I, II, IIIの間の難易度が明らかにできなかったことから、Overlap に関しても分類基準の再考が必要であることが示唆された。これらのことから、中国語母語の日本語学習者の漢字語習得研究に従来の枠組みをそのまま用いることは適当ではないと思われる。以下で問題点について詳しく検討したい。

3. 文化庁／三浦の枠組みの検討

3.1. Overlap の下位分類の検討

2.1. で述べたように文化庁／三浦の枠組みでは、Overlap を意味範囲をもとに分類しており、陳(2003)はこの基準に基づいて語彙を選択し調査している。ここで問題に使用された漢語のいくつかを取り上げて、Overlap I, II, IIIの難易度が解明されなかった理由を考えてみたい。

まず、Overlap IIとされた「遠慮」という漢語を取り上げる。この語は中国語では「深い考え」という意味しかない。それに対し、日本語には①「深い考え」という意味もあるが、さらに②「遠慮なくいただきます」、「招待を遠慮する」などという用法がある。この点から陳(2003)はOverlap IIとしている。しかし、日本人は共通するとされる①の「深い考え」という意味で「遠慮」を使用することは少なく、圧倒的に中国語にない②の意味で使用している。つまり、「遠慮」に日中で共通する意味はあるものの、その意味がどの程度一般的に使われていると感じるか、つまり、その意味使用の一般性に差があると言える(「意味使用の一般性」とは、ある意味が一般的に使用されているかどうかについての母語話者の主観的判断に基づくものである)。

また、加藤(2005)はOverlap IIの調査に用いた「程度」という漢語について、“degree”と“about”の2つの意味のうち、“about”の用法のほうが習得上難しい要因として、日本語における使用の一般性が低いということにもふれている。したがって、これらの研究から、中国人学習者が母語の知識で未知語の意味を推測した場合、同じカテゴリーの語であっても日中で共通する意味使用に関してその一般性に違いがあると、習得の難易度に違いが生じる可能性が示唆される。

以上、Overlap IIの問題点について、実際に陳(2003)、加藤(2005)で用いられた語を例として述べたが、この問題はIとIIIにも共通する。表2は文化庁／三浦の枠組みでOverlap I, II, IIIに分類される語を意味使用の一般性に関して日中比較したものである³。

表2で分かるように、Overlap Iは中国語のほうが意味範囲が広いもので、「解決」、「入手」などの漢語があげられている。このうち、「解決」は中国語には「問題を解決する」、「敵を全滅させる」という意味があり、両方とも使用の一般性が高い。このうち日中に共通する「問題を解決する」という意味は日本語でも使用の一般性が高いものである。一方、「入手」は、「情報を入力する」が両者に共通とされているが、中国語ではこの意味は使用の一般性が低く、主に日本語にはない「着手する」という意味で使われる。

Overlap IIIは日中で重なる意味の他にそれぞれ別の意味を持っているもので、「単位」、「下手」などの漢語があげられている。このうち「単位」は、日中に共通する「数量の規準」という意味はどちらの言語でも使用の一般性が高い。そして、日本語だけにある「履修単位」という意味も、

表2 Overlap I, II, IIIの意味使用の一般性

		日本語の辞書にある意味		中国語の辞書にある意味	
		一般性が高い	一般性が低い	一般性が高い	一般性が低い
Overlap I	解決	問題を解決する		解決問題（問題を解決する） 把敵人完全解決了（敵を全滅させた）	
	入手	情報を入手する		從這裏入手（ここから着手する）	Wii 入手了（Wiiを入手した）
Overlap II	現金	キャッシュ 現金な人		キャッシュ	
	上品	上品な言葉	上品だけを扱う老舗	這是酒中上品（酒の中で最もよいもの）	
Overlap III	単位	数量の基準 卒業するまであと2単位をとらなければならない。		数量の基準 回到單位去（それぞれの職場に帰っていく）	
	下手	不器用なこと 下手に口を出さないほうがいい。		無從下手（どこから手を出せばいいのかわからない）	下手（不器用なこと）

□ は日中で重なる意味

■ は日本語あるいは中国語にしかない意味

中国語だけにある「職場」という意味も、それぞれ使用の一般性が高い。一方、「下手」は「不器用なこと」という意味が両者に共通とされるが、日本語では使用の一般性が高いのに対し、中国語では使用されることはない。

このように Overlap すべての下位カテゴリーに関して日本語、中国語双方の母語話者による意味使用の一般性を考慮していない問題があると言える。

3.2. Nothing についての検討

Nothing に関しては、上述した通り大村（1965）ですでに分類されていたが、文化庁（1978）には取り入れられておらず、文化庁／三浦の枠組みでは、中国語にないものはすべて Nothing として扱われている。しかし、陳（2003）、加藤（2005）の研究結果で裏付けられたことから、Nothing の分類にあたっては意味の推測可能性を考慮すべきである。例えば、Nothing に「既婚」と「我慢」があげられているが、「既婚」は漢字の「既」（すでに起こっていること）と「婚」（夫婦になる）から、中国語母語の日本語学習者にとって「すでに結婚している」という意味を推測することは易しい。しかし、「我慢」は漢字の「我」（自分）と「慢」（おそいこと）から漢語の

意味の「耐え忍ぶこと」を推測することはできない⁴。このように、Nothing に分類される語彙は意味の推測難易度にばらつきがあると考えられる。

以上のように Overlap については日中で共通する意味の使用の一般性、Nothing については意味の推測可能性の問題を指摘した。以下でこれらの問題の解決策を考え、習得研究に応用できる枠組みの提案を試みる。

4. 意味使用の一般性と意味推測可能性を考慮した枠組み

前節で文化庁／三浦の枠組みを検討した結果、そのまま習得研究に応用できないことが示唆された。新しい枠組みを提案する前に、まず本枠組みによって語のどの側面の習得を測定したいのかを明確にしておきたい。語の習得の対象は通常「形式」、「意味」、「用法」の3つの側面があると考えられる。そして、習得には、「理解」（聞く・読む）と「使用」（話す・書く）の2側面がある。本研究では、読解の場面において、中国語母語の日本語学習者の漢字語の意味理解の難易度に焦点を当てて、枠組みを考えたい。

4.1. 新たな枠組みの提案

本稿で提案するのは文化庁／三浦の枠組みを表3のように修正したものである。習得研究に応用するために、意味使用の一般性及び、意味推測可能性という観点を組み込んでいる。

表3から分かるように Same と Different は文化庁／三浦の枠組みと重なるが、意味使用の一般性を考慮した。Overlap は意味範囲の広さを基準にして3分類した文化庁／三浦に対し、本稿の枠組みでは、母語話者による意味使用の一般性が高いかどうかを基準にして2分類した。日中で共通の意味の母語話者による使用の一般性が高いものが一致する場合を Overlap ①とし、使用の一般性が高いものが異なる場合を Overlap ②とする。したがって、それぞれのカテゴリーに入る語も異なる。

Nothing は大村（1965）、陳（2003）、加藤（2005）の研究に基づき、漢字からの類推が可能なカテゴリーを Nothing ①、困難なカテゴリーを Nothing ②として2つに分類した。また Nothing にも多義語があり、使用の一般性に違いがある可能性があるところから、Nothing にも一般性を考慮した⁵。

意味推測可能性の観点を Same, Overlap, Different に取り入れた研究もある（野沢 1970）。しかし、中国語母語の日本語学習者がこの3分類の漢字語の意味を理解する際、その語が母語で既知であるためにその知識を利用して推測しているのか、語を構成する漢字から推測しているのかは判断ができない。したがって、Same, Overlap, Different に意味推測可能性という観点を取り入れることは難しい。そのため、意味推測の可能性は、中国語にはない語彙であるため漢字からの推測しか方法がない Nothing の下位分類にのみ適用する。

以上のように意味使用の一般性と推測可能性という2つの概念を取り入れて新しい枠組みを提案した。ここで本枠組みと予測される習得との関係について述べたい。

本枠組みを習得研究に利用する際、意味使用の一般性が高いかどうかという基準は、日本語と

表3 意味使用の一般性と意味推測可能性を考慮した枠組み

漢字語種類	中国語	日本語	共通の意味の使用の 一般性の 一致／不一致	漢字からの 意味推測	例	文化庁／三浦 との対応
Same	$\frac{m1}{(m2)}$	$\frac{m1}{(m2)}$	一致		理想 露骨	Same Same
Overlap ①	$\frac{m1}{(m2)}$	$\frac{m1}{(m2)}$	一致		解決 現金 単位	Overlap I Overlap II Overlap III
Overlap ②	$\frac{m1}{(m2)}$	$\frac{(m1)}{m2}$	不一致		入手 上品 下手	Overlap I Overlap II Overlap III
Different	$\frac{m1}{\phi}$	$\frac{\phi}{m2}$	不一致		学長 勉強	Different Different
Nothing ①	ϕ	$\frac{m1}{(m2)}$		可能	既婚	Nothing
Nothing ②	ϕ	$\frac{m1}{(m2)}$		困難	我慢	Nothing

注1：四角で囲ったものは使用一般性の高い意味。mは意味。複数の場合はm1, m2と示す。同じ番号は同じ意味を示す。
注2：()内の意味は中国語、日本語のどちらかが欠落する場合がある。

中国語とでは異なる。日本語の意味使用の一般性は、その漢字語が習得すべき語であるか否かの基準としての役割を果たす。使用の一般性が低い意味は習得の調査に含める必要はないと考えられる。それに対して、中国語の意味使用の一般性は、習得に影響する要因となる。中国語でも日本語でも意味使用の一般性が高い場合、つまり、使用の一般性が高い意味が一致する場合、正の転移としてプラスの働きをすると予測される。逆に使用の一般性が高い意味が中国語と日本語で不一致となる場合、負の転移としてマイナスの働きをすると予測される。したがって、Sameは、使用の一般性が高い意味が中国語と日本語で一致するため、最も容易であると考えられるのに対し、Differentはまったく逆であるため困難であると考えられる。

Overlap ①は中国語の使用の一般性が高い意味が日本語と一致する点がSameと同じであり、それほど難しくない可能性がある。しかし、多義語であるため、意味使用の一般性が高いものが複数存在する場合は（例：現金）、Sameより困難であると考えられる。Overlap ②は、使用の一般性が高い意味が不一致である点がDifferentと共通する。しかし、使用の一般性は低くても、日本語で使用の一般性が高い意味も存在する場合は（例：入手）、それが多少プラスに働く可能性も考えられ、Differentより易しいと予測できる。それに対して、同じOverlap ②の語でも、中国語に日本語で使用の一般性の高い意味が存在しない場合は（例：遠慮）、Differentと同じ状況になると思われる。

推測可能性で下位分類したNothingに関しては、推測できるものが易しく、できないものが難しいことが明らかになっている（陳 2003；加藤 2005）。一方、Nothingの意味は中国語にないという点ではDifferentと同じである。しかし、中国語にその語彙がなく推測も困難である

Nothing ②と、まったく負の転移としてマイナスの働きをする Different が、習得にどのように作用するのは予測できない。この点は今後の調査の課題となろう。

4.2. 意味使用の一般性と意味推測可能性の調査

前節で習得研究に利用できる新たな枠組みを提案した。しかし、実際に漢字語を分類し、習得研究を行う際、意味使用の一般性と意味推測可能性の調査が必要となってくる。現状には利用できるデータベースがないため、考えられる調査方法及び、試行例を紹介したい。

4.2.1. 意味使用の一般性の調査

4.2.1.1. 調査方法と試行例

日中の漢字語の辞書的意味に対し、日本語と中国語の母語話者に使用の一般性を問う方法が考えられる。その試行例を紹介する。

調査対象語は文化庁／三浦の枠組みの12語（表1の例）とし、日本語と中国語の母語話者がそれぞれ80名を調査対象者とした。日本語母語話者の年齢は20代から50代までで、学歴は高卒から大学院程度である。中国語母語話者は日本語学習歴のない台湾人で、年齢と学歴は日本語母語話者と同様である。

日本語の辞書的意味は『広辞苑』第5版、中国語の意味は『国語辞海』から抜粋した⁶。各調査対象語について「日頃使われている意味である」、「その意味はあまり使わない」、「そのような意味を知らない」という3つの基準を設定し、判断を求めた。

4.2.1.2. 調査結果

日中母語話者の意味使用の一般性の調査結果を表4に示す。「日頃使われている意味である」という回答が80%に達するものは使用の一般性が高いものとした。調査の結果は、予測通り、すべての漢字語において、意味使用の一般性が高いものと低いものがあることが確認された。またOverlapにおいて、「解決」「現金」「単位」の3語は、共通する意味の母語話者による使用の一般性が高いものが一致したためOverlap ①に分類され、「入手」「上品」「下手」の3語は不一致であったためOverlap ②に分類された。

4.2.2. 意味推測可能性の調査

4.2.2.1. 調査方法と試行例

中国語母語の日本語学習者に意味の類推を求める方法（周1986）を用い、本枠組みでNothingに分類される語の漢字からの意味推測可能性の調査を試行した。その例を紹介する。

調査対象語は文化庁／三浦の枠組みでNothingの例としてあげた「既婚」と「我慢」の他に、6語（敗戦、強気、欲張、派手、買物、怪我）を追加した⁷。調査対象者は日本語学習歴のない台湾人中国語母語話者15名である。8語の漢字語を見せ、意味を類推して書いてもらった。

表4 漢字語の意味の母語話者による使用の一般性（日中母語話者各80名）

分類	調査語	日本語の意味	中国語の意味	日本語母語話者	中国語母語話者
Same	理想	理想が高い	理想實現(理想を実現した)	99%	96%
	露骨	露骨な描写	他說話太露骨了(露骨な話)	100%	80%
		戦場に骨をさらすこと	骸骨曝露 (戦場に骨をさらすこと)	2%	11%
Overlap ①	解決	問題を解決する	解決問題(問題を解決する)	100%	95%
		—	解決敵人(敵を消滅する)	—	90%
	現金	現金で支払う	付現金(現金で支払う)	90%	97%
		現金に換える	—	92%	—
		現金な人	—	84%	—
	単位	億単位の金を動かす	以公分為單位 (センチを単位とする)	100%	94%
		卒業するまであと2単位	—	100%	—
—		回到單位去(それぞれの職場に帰っていく)	—	94%	
Overlap ②	入手	情報を入手する	Wii 入手了 (Wiiを入手した)	100%	56%
		—	從這裏入手 (ここから着手する)	—	82%
	上品	品のよいこと 例:上品な言葉	—	100%	—
		品質のよいこと 例:上品だけを扱う老舗	品質最好的 (品質のよいこと) 例:這是酒中上品 (酒の中で最もよいもの)	41%	83%
	下手	下手な歌	下手(不器用なこと)	100%	24%
		下手に口を出さないほうがいい	—	80%	—
		—	無從下手(どこから手を出せばいいのかわからない)	—	83%
Different	学長	学長に就任する	—	100%	—
		—	他是我的學長 (彼は私の先輩です)	—	82%
	勉強	数学を勉強する	—	99%	—
		お値段は勉強しときます	—	44%	—
		—	不要勉強他 (無理強いしてはいけない)	—	95%
Nothing ①	既婚	既婚者	—	100%	—
Nothing ②	我慢	酒を我慢する	—	100%	—

注: 網掛けは使用の一般性が80%を超えるもの

表 5 Nothing の語彙の意味推測可能性

	Nothing ①				Nothing ②			
	既婚	敗戦	強気	買物	我慢	欲張	派手	怪我
正解	10名	15名	10名	15名	0名	0名	0名	0名
不正解	5名	0名	5名	0名	15名	15名	15名	15名

4.2.2.2. 調査結果

表5に示した結果の通り、推測によって正解できる語彙とできない語彙に分かれた。母語話者10名以上が正しく類推できたものをNothing①、2名以下のものをNothing②とした⁸。今回の調査対象語はNothing①に「既婚」「敗戦」「強気」「買物」が、Nothing②に「我慢」「欲張」「派手」「怪我」が分類された。

以上のように、意味使用の一般性と漢字の意味推測可能性の調査及び、試行例を紹介したが、使用一般性の高低と意味推測可能性の基準について、より厳密で統計的な検定が必要となる。

5. まとめと今後の課題

本稿は、習得研究に応用する立場でこれまでの研究に用いてきた文化庁／三浦の枠組みを見直し、その不十分な点を指摘し、漢字語の共通する意味の日中母語話者による使用の一般性、及び、意味推測可能性の観点を加えて新しい枠組みを提案した。そして、漢字語分類に必要な意味使用の一般性と意味推測可能性の調査方法及び、試行例を紹介した。今後まずこの枠組みを用いて、中国語母語の日本語学習者にとって学習困難な項目を特定する実証研究を行いたい。そして、最終的には日本語の漢字語の教育に効果的な教授法を提案していきたい。

注

- 1 漢字語とは、漢字で表記される語を指すものであり、漢語だけでなく漢字表記の和語（例：強気、買物）も含む。本稿では、後者を含む場合に「漢字語」と表記し、漢語と区別した。
- 2 表1にあげられている漢語の例は、従来の枠組みの分類基準に沿って、筆者が選出したものである。
- 3 表2の辞書の意味は、日本語は『広辞苑』、『新明解国語辞典』、『岩波国語辞典』、中国語は『国語辞海』、『東方中国語辞典』を参考にしたものである。中国語の表記は繁体字とする。
- 4 本稿では意味の推測可能性としたが、透明度（transparency）という用語が使われることもある。
- 5 例えば「買物」には「買物に行く」と「これは買物です」（これはお買得です）の複数の意味がある。前者は使用の一般性が高く、後者は低い。そのため、意味使用の一般性に差がある。
- 6 日本と台湾で最も広く使用されている辞書であるという理由で、『広辞苑』と『国語辞海』を採用した。例文について、日本語では、『広辞苑』に適切な例がない場合、『大辞林』を参考にした。中国語では、『国語辞海』に例文がないため、『重編國語辭典修訂本』、『東方中国語辞典』を参考にした。
- 7 「欲張り」と「買い物」の2語は漢字仮名交じり表記が一般的であるが、調査対象者に日本語

学習経験がないため、「欲張」、「買物」と表記した。

- 8 Nothingの判定基準は周(1986)に拠った。周(1986)の場合は20人中13人以上理解できたものを理解可能な語とし、3人未満の語を理解できなかった語とする。

参考文献

- 安龍洙(1999)「日本語学習者の漢語の意味の習得における母語の影響について－韓国人学習者と中国人学習者を比較して－」『第二言語としての日本語の習得研究』3, 5-17, 第二言語習得研究会
- 大村益夫(1965)「中国人・朝鮮人に対する漢字語彙教育について」『講座日本語教育』1, 61-77, 早稲田大学語学教育研究所
- 加藤稔人(2005)「中国語母語話者による日本語の漢語習得－他言語話者との習得過程の違い－」『日本語教育』125, 96-105, 日本語教育学会
- 周錦樟(1986)「日中漢語対応の問題－文化庁『中国語と対応する漢語』について」『日本語日本文学』12, 69-89, 輔仁大学外語学院 日本文学系
- 曾根博隆(1988)「日中同形語に関する基礎的考察」『明治学院論叢 総合科学研究』30, 61-96, 明治学院大学一般教育部学会
- 陳毓敏(2003)「中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得について－同義語・類義語・異義語・欠落語の4タイプからの検討－」『日本語教育学会秋季大会予稿集』, 174-179, 日本語教育学会
- 野沢素子(1970)「中国人に対する日本語教育－漢字語彙を中心にして－」『日本語と日本語教育』2, 101-113, 慶応義塾大学国際センター
- 文化庁(1978)『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- 文化庁(1983)『漢字音読語の日中対応』大蔵省印刷局
- 宮島達夫(1958)「近代日本語における単語の問題」『言語生活』79, 17-26, 筑摩書房
- 三浦昭(1984)「日本語から中国語に入った漢語の意味と用法」『日本語教育』53, 102-112, 日本語教育学会

参考辞書

- 日本語:『広辞苑』第5版 岩波書店／『新明解国語辞典』三省堂／『岩波国語辞典』岩波書店『大辞林』第2版 三省堂
- 中国語:『国語辞海』光田出版社／『重編國語辭典修訂本』教育部国語推行委員会／『東方中国語辞典』方書店

謝 辞

本稿の執筆にあたり、お茶の水女子大学の佐々貴義則先生からご指導をいただきました。また、査読者の先生方、お茶の水女子大学大学院の向山陽子さん、石井怜子さん、吉澤真由美さん、東京大学非常勤講師の石崎晶子さんに貴重なご助言をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

(投稿受理日：2008年2月15日)
(最終原稿受理日：2008年10月30日)

陳 毓敏 (ちん ゆみん)

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科国際日本学領域

112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

yumin55jp@yahoo.co.jp

A new framework for acquisition of Japanese kanji compounds targeting Chinese learners of Japanese:

In consideration of general semantic usage and semantic inferability

CHEN Yumin

Graduate Student, University of Ochanomizu

Keywords

Japanese kanji compounds, general semantic usage, semantic inferability,
Chinese learners of Japanese, acquisition difficulty

Abstract

This study proposes a new framework which can be applied to Japanese kanji compound acquisition for Chinese learners of Japanese. To date, there have been four categories according to semantic and orthographic similarities between Japanese and Chinese: same form and meaning in Chinese (Same) ; same form with divergent meaning (Overlap) ; same form but unrelated meanings in Japanese and Chinese (Different) ; and compounds only in Japanese (Nothing) . Seminal works and the latest published works do not explore in depth the difficulties of two-word kanji compound acquisition. In addition, it is not simple or sufficient to apply standard acquisition research techniques to this subject.

The new framework addresses the complexity of kanji acquisition by introducing the concept of general semantic usage and semantic inferability. Two-word kanji can be more effectively classified for acquisition purposes. In research presented here classifications are recommended by general semantic usage, degree of difficulty and semantic inferability. This work is suitable for word acquisition study and contribution to multisense word research.